

徳川みらい学会第3回講演会

徳川みらい学会「第3回講演会」を8月26日、静岡市葵区のしずぎんホール「ユーフォニア」で開催しました。前半は、芳賀徹静岡県立美術館長が9月17日から11月3日まで同館で開催する企画展「徳川の平和 250年の美と叡智」の見どころを紹介。後半は、国立歴史民俗博物館名誉教授の高橋敏氏が「江戸の平和力」をテーマに講演しました。両氏の講演要旨は次の通り。

「徳川の平和展の見どころ」



静岡県立美術館
館長
芳賀 徹氏

9月17日から静岡県立美術館で開催する企画展「徳川の平和 250年の美と叡智」の中から、平賀源内の「西洋婦人図」(神戸市立博物館蔵)を紹介します。1770年、42歳の源内が2度目の長崎留学時に描いた作品です。源内は18世紀後半の知的冒険力に富んだ人物です。オランダ通詞の家に飾られていた絵を模写したのではと思われまます。



この作品を最初に評価したのは、

「江戸の平和力」



国立歴史民俗博物館
名誉教授
高橋 敏氏

家康がつくった国のかたち

明治の国文学者・藤岡作太郎で「麻布に油絵具で描かれ、日本人らしい描き方で、習熟した腕前ではない。婦人の顔は、自分から名乗り出て事を成すような性分を示している」と書いています。

この婦人像は、18世紀のフランスやイギリスで流行した貴族や高級ブルジョアの奥さんの肖像画に似ています。同じような髪型と洋服の西洋婦人を描いた雅章という画家の絵が長崎で発見されました。左側に財布を広げている男性が描かれているので、こちらの女性は高等娼婦かもしれませぬ。

また、アメリカのニューハンプシャー州で活躍していた女性の旅絵師が1820年に描いた作品「流行りの髪型をした若い女」にも、同じような髪型と洋服の婦人像が描かれています。

18世紀の日本は鎖国という制度は守っていましたが、油彩画の描き方も伝わっていました。西洋の文明を入れながら、徳川の平和は一層充実し、ベリベリが来航する頃にはエリートたちの開国の準備は整っていました。その端緒のひとつが「西洋婦人図」です。

家康が遺した言葉とは

外交は善隣友好関係に切り変え、長崎を通じて海外情報を得て、世界から孤立することはありませんでした。これらがひとつになって江戸の平和が250年、維持されました。

家康が駿府城で將軍秀忠の使者・井上主計頭に語った教訓は、東照宮御遺訓として密かに伝えられました。

「我も天道へ忠信の者なるゆへに、今天下の執柄を天道よりあづけたまへり。政道若し邪路にへんずる時は、天より執柄をたちまち取りあげ給ふぞ。天下の治乱はただ將軍の寸心の内に有るぞ。此の心を能々守り給へと申すべし。誠に天下は天下の天下なり。(中略)新法を立て家を新しくする事なかれ。無調法たりとも、予が立て置きたる家法を失ふべからずと申すべし」。

白隠は「辺鄙以知吾」(1754)の中で、大塩平八郎は檄文(1837)の中で、東照宮御遺訓を引用して、当時の幕政の乱れを批判しました。

小栗上野介忠順は1862年、福澤諭吉は1865年、家康がつくった国のかたちの原理原則に基づいて、尊王攘夷に異議を唱えました。

徳川による近代化の延長に戦後70年の平和があり、その根源は家康がつくった国のかたちです。

(文責：静岡商工会議所企画広報室)

個人・法人会員を随時募集しています。皆さまのご入会をお待ちしております。

〈お問い合わせ〉徳川みらい学会事務局 〈TEL〉284-9660 〈HP〉[徳川みらい学会](#) [検索](#)